

▼「とうま蟠龍まつり」の龍おどり

食育・木育・花育から  
つながる心育へ



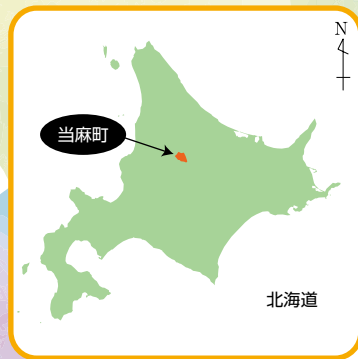
## 北海道 当麻町

とうまちょう

### 当麻町の概要

当麻町は、北海道の穀倉地帯といわれる上川振興局管内のほぼ中央、北海道の屋根、大雪山連峰の麓に位置します。屯田兵により開拓の跡が降ろされたのは明治26年。今年で開拓126年を迎えました。山と河川に囲まれ、肥沃で自然に恵まれた大地で農林業を中心に発展した町です。

農産物では、「高級すいか」として全国に名高い「でんすすいか」（今年の初競りでは55万円）をはじめ、近年、全国的に高い評価を受けている北海道米の中でも良食味米として知られる「当麻米」を筆頭に、北海道内トップ



◀当麻町の特産品「でんすけすいか」



クラスの生産量と販売額を誇るキュウリ、高品質なミニトマトなどが栽培されています。花卉では北海道特有の寒暖の差を生かし、夏バラ日本一」と市場の高い評価を受ける「大雪の薔薇」、町花であり長い歴史の中で技術を培ってきた「菊」の栽培が盛んです。

観光においては、龍伝説が眠り、世界的に珍しい管状鍾乳石（マカロニ鍾乳石）を見ることが出来る北海道指定天然記念物「当麻鐘乳洞」が有名です。また、市街中心部からさほど離れてい

ない場所にある当麻山には、フィールドアスレチックをはじめキャンプ場、世界の昆虫館「パピヨンシャトー」など一日楽しめる施設が充実しています。さらに当麻山麓ではスポーツ設備が充実。球場、多目的グラウンド、テニスコート、パークゴルフ場、当麻発祥の競技「フィールドボール場」（ゴルフのピッチングウエッジで公式テニスボールを打つゴルフールのスポーツ）があり、休日には大会などで多く



▶北海道指定天然記念物「当麻鐘乳洞」

の人が訪れます。温浴施設「ヘルシーシャトー」も併設しており、スポーツで汗を流した人、キャンプ客など多くの人にご利用頂いています。

特産品では農産物の他に、冬期閉鎖中の当麻鐘乳道内で熟成させた日本酒「龍乃泉」を旭川市にある高砂酒造とともに開発。毎年4月末に販売を開始する同商品は、町内販売とふるさと納税返礼品という限定した販路にもかかわらず、8月には完売という好調な売れ行きを見せています。

イベントでは、8月上旬に「とうま蟠龍まつり」が行われます。龍伝説にちなんで、長崎くんちの蛇おどりからヒントを得た「龍おどり」や郷土芸能「蟠龍太鼓」をはじめとしたさまざまな催し物で来場者を楽しませています。10月上旬には当麻産のそば粉を使用した新そばや新鮮な野菜が味わえる「新米・新そばまつり」、11月3日には町民が作り上げる文化の祭典「生涯学習フェスティバル」、2月上旬には町内の青年が行う「アイスキャンドルライトフェスティバル」など、町民の手による四季折々のイベントが見物です。

食育、木育、花育

当麻町では大自然の恵みを生かしたまちづくりを進めています。それが「食育、木育、花育からつながる心育」です。

当麻町の考える「食育」とは、我々が生きるためには、懸命に生きてきた大切な食の命を頂いている」というこ



▶食育拠点「田んぼの学校」での田植えの様子



◀ 木育の拠点「くるみなの散歩道」



とを知り、食の大切さを学ぶこと。町が所有する総面積1・9 haの圃場「田んぼの学校」では毎年、町内の小中学生が田植え、稲刈りを行っています。収穫したお米は子どもたちが1年間食べる給食米に全量充てられます。泥だらけになり腰の痛みを感じ、時には悪天候の中、田植え、稲刈りを行い、苦労して育てたお米を口にする。食の命を育てることで、食の大切さを学んで

います。

「木育」とは、北海道の厳しい環境の中を生き抜く樹木の命のたくましさを感じることに、我々の生活を豊かにする木に触れ、命の温もりを感じることに。当麻山には約3kmの遊歩道「くるみなの散歩道」があり、誰もが気軽に樹木をはじめとした豊かな自然に触れることができ、森林浴を楽しめます。また、構造材に町産木材を100%活用した木育拠点施設「くるみなの木遊館」



▶ 木育の拠点「くるみなの木遊館」

用した木育拠点施設「くるみなの木遊館」には、子どもたちが木製のおもちゃで遊べる木育広場があり、毎日多くの家族連れでにぎわっています。さらには木材加工機能も備わっており、

来館者は木育広場からガラス越しに木材加工の様子を見学したり、実際に木工体験をすることができます。木育を具現化することができ、中学生が町産木材を取組として、3年間の中学校生活で使用する活動も今年度スタートしました。

「花育」とは、可憐に咲き誇る花の鮮やかな彩りから花の命を感じ、その姿に心癒され、命の優しさに触れること。当麻山

▶ 花育の拠点「くるみなの庭」



にある花育の拠点「くるみなの庭」には、100種以上の花と自然の地形を生かした遊具が設置され、大人も子どもも自然と触れ合ふことのできるスペースとなっています。植えられている植物は全て多年草。芽が出て、花が咲き、枯れ、翌年にまた芽が出て…四季を通じて違った表情を見せる植物を

目にすることで植物の命を感じ取ることもできます。また、果物や野菜も植えられており、利用者は花を摘んだり、味を楽しんだり、自由に過ごせます。目で自然の美しさを感じ、耳で自然のささやきを聞き、肌で自然に触れ、鼻で自然の香りを感じ、口で自然の恵みを味わう。五感を生かして自然を感じ

る場所でもあります。

食育、木育、花育を通じて自然界に生きるものの生命を感じ、命を学ぶことで心を豊かに育てる「心育」。町ではさらに、自然の恵みあふれる当麻町に生まれたことを誇りに持つ「郷土愛」を育むことが大切であると考えます。

各拠点施設の名称に使用されている「くるみな」とはアイヌ語の「クル（人）」と「ミナ（笑つ）」を組み合わせたもの。人を笑顔にする場所であり、「みんな（ミナ）が来る（クル）」場所であってほしいという願いを込めています。

### 町産木材の活用

当麻町の面積の約65%は山林。その中で民有林の約半分が人工林であり、その8割が林齢40年生となり伐期を迎えています。計画的に木を伐り、植栽と保育を行うことで「未来へ残す山づくり」を続けています。

伐期を迎えた木を有効に活用するために当麻町が行うのは町産木材の有効活用。一つは住宅への町産木材活用です。当麻町産の木材を使用して住宅を

◀町産木材を100%使用した木造の「役場新庁舎」



新築する場合に、最大250万円の補助をする「町産材活用促進事業補助金」や、元当麻町民が、町内の親族を支援するために当麻に戻り住宅を新築する場合に、最大450万円（町産木材を使用した場合）の補助をする「おかげりふるさと応援事業」、さらに、町内の企業はもとより新規で当麻町に出店しようとする起業者のために、店舗の新築・増改築費用最大450万円（町

産木材を使用した場合）を補助する」とうまのお店元気事業」を行っています。もう一つは公共施設への町産木材活用。公営住宅、子育て総合支援センターにはほぼ100%、公民館「まともる」、くるみなの木遊館、さらに今年完全完成を迎える役場新庁舎には町産木材を100%活用しています。我々の生活に息つき、生活を豊かにしている木に触れることで命の温もりを感じる「木育」の理念が町産木材活用品にも生かされています。

### 子育て環境の充実

当麻町では子育て環境の充実化にも力を入れています。中学生までの医療費無料化や一部予防接種の無料化、乳幼児健康診査の充実などに取り組む他、小中学生の修学旅行費全額補助や高校生への就学補助などオリジナルの支援策を行っています。また1歳から15歳の誕生日には毎年、図書をプレゼント。さらに1歳の誕生日には図書とともにバラの花束とお子さんのイラストが入った木製フレームを町長が直接お届けしています。

町産木材の補助や「食育、木育、花育」の推進により、着実に移住者が増えており、昨年販売を開始した造成宅地「ハートフルタウンとうま」は好調な売れ行きを見せています。

### 未来へのまちづくり

平成30年4月末の人口は6,537人。昭和30年当時の人口14,000人と比べると大幅に減少していますが、町産木材活用など定住促進の施策により、町外からの移住者も増えています。また「とうまのお店元気事業」など新規出店者を応援する事業により、町外から移住し起業する事業者も増加しています。

「食育、木育、花育」をはじめとした人に優しいまちづくりとともに、未来への資源づくりを進め、誰もが住みやすく、次代を担う子どもたちが夢を持てる町「当麻町」をこれからも作り続けます。

当麻町長 菊川 健一  
(平成31年1月7日付第3065号)



▼水没することから「幻の橋」として知られるタウシュベツ川橋梁



# 地方を元気に—地方創生のチャレンジ 〜だれもが生涯活躍のまちづくり〜

豊かな自然に囲まれた  
畑作と酪農が中心の町

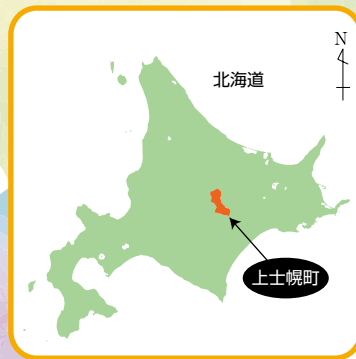
北海道十勝管内の北部に位置する上士幌町は、日本最大の国立公園「大雪山国立公園」の東山麓に広がる、畑作と酪農が中心の町です。面積の約4分の3を森林が占める緑に囲まれた土地で、年間を通して降水・降雪量が少なく、全国的にも有数な日照時間に恵まれています。

すべてに手間ひまをかけるまちづくりを意味する「スロータウン」を理念に、豊かな自然と資源を活用しながら、健康・観光・環境と、子育て・教育をコンセプトにしたまちづくりの力を注いでいます。

町内には、源泉かけ流しの「ぬかびら源泉郷」、日本最大の公共育成牧場「ナイタイ高原牧場」、丘陵地の地形を

## 北海道 上士幌町

かみしほろちょう



取り入れた「上士幌ゴルフ場」、北海道遺産に認定された「旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群」など、魅力あふれる観光資源に恵まれています。

町の最大のイベントとして、国内で初めて開催された熱気球競技大会である「北海道バルーンフェスティバル」があり、毎年多くの観光客の皆様が訪れています。

過疎の町から  
人が移り住む町へ

町の人口は、2020年6月末時点で4,976人。1955年の1万3,608人をピークに、第1期総合戦略期間が2015〜2019年の5年間に、人口が42人増加、社会増も244人にのぼっています。

その背景には、町が積極的に取り組んできた移住・定住対策や、子育て支

援があります。

移住・定住対策では、2010年に設立したNPO法人「上士幌コンシェルジュ」を中心に、移住・定住体験プログラムの企画や移住体験用住宅の企画・紹介・管理、それらに関連した情報発信などを通して、移住・定住支援を行っています。統計のある2005年から2019年までに190人の方々が上士幌町に移住されています。

移住者同士のネットワークもとてもしっかりしており、お互いに情報交換をしたり地域住民と触れ合っています。先輩移住者が新たに移住してきた

方の相談役になっている環境は、移住を考えている方たちにとって心強いものです。

### 子育てや雇用支援を通じて 安心して暮らせる町に

子育て支援への取組としては、2015年に認定こども園を新設し、さらに翌年4月より保育料を10年間完全無料としています。ほかにも、高校生までの医療費無料化や、中学生以下の子どもがいる家庭に対して住宅新築の費用を助成するなど、子育て世代が安心して暮らせる環境づくりを進めています。



▶ 毎年8月に開催される北海道バルーンフェスティバル



▲ 認定こども園

ます。

これらの施策の財源となっているのが「ふるさと納税」です。町では、ふるさと納税導入当初から「子育て・少子化対策」を寄付金の使い道として掲げていましたが、2014年に「子育て少子化対策基金条例」を制定し、寄付金を積み立て、各種子育て施策に活用しています。2016年度に全国から寄せられたふるさと納税寄付金は21億円を超えました。このように多くの御寄付が集まったのも、ひとえに多くの皆様にまちの取組を「理解いただいた賜物と感謝しています」。

また近年は、子育て支援だけでなく、雇用面などの支援も進めています。例えば、2016年に役場内に開設した無料職業紹介所もその一つです。待遇

や仕事内容だけでなく、企業の雰囲気や経営者の思い、そこで働く人たちの表情を伝えるために、求人サイトや情報冊子なども活用して情報を発信しています。

2018年度から「生涯活躍のまち」の推進母体「㈱生涯活躍のまち かみしほろ」においても無料職業紹介が開始され540件以上の相談があり、採用実績は50件を超えました。こうした取組を行うことで、地場産業・地域経済の活性化にもつなげていきたいと考えています。

### 「生涯活躍のまち」に向けた 取組を本格スタート

全国で人口減少が加速していく中、東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかける「地方創生」の動きがさらに活発化しています。

地方創生とは、子育てや仕事に限らず、総合的にどのような町を築いていくかという地域づくりにも深く関わります。町では2015年に策定した「上士幌町人口ビジョン・総合戦略」において「上士幌版生涯活躍のまち」を重要政策とし、2016年度から取組を本格的にスタートさせました。

「生涯活躍のまちづくり」は、子どもからシニア、外国人など、だれもが、地域住民と交流しながら健康で活動的に生活し、生涯活躍できる町を目指す取組です。



2017年6月には、生涯学習・世代間交流の拠点施設として、生涯学習センター「わっか」がオープンし、学童保育所、子ども発達支援センター、高齢者生きがいセンターなどを統合しました。子どもから高齢者まで、気軽に立ち寄れる施設として活用されています。

さらに同年9月、まちづくり会社である「㈱生涯活躍のまち かみしほろ」を設立しました。

同社は、主に地域包括ケアの充実、生涯活躍機会の充実、住みやすいと感じられる魅力ある共助のまちづくりを行っています。シニアや主婦などの方に働く場を提供するための人材センターや、まちなかで移住者などが起業にチャレンジするためのサポートなども進めています。また、生涯学習の場



▲生涯学習センター「わっか」プレイルーム

を提供する「生涯活躍かみしほろ塾」を開校し、上士幌町でしかできない専門塾として地域活性化を図っていきます。

## 新しい時代の人材を育てる 「生涯活躍かみしほろ塾」

「生涯活躍かみしほろ塾」は、地域の特性を踏まえたさまざまな学習機会を設けて町内外から広く参加者を募り、知的・技術的に新しい体験を提供すると同時に、世代や地域・文化的背景を横断した人的交流を促進する場となっています。

町内だけでなく、十勝管内の近隣市町村や道内、さらには首都圏を含む全国からお越しただいております。

## 地方を元気に 「地方創生へのチャレンジ」

上士幌町はこのほかにも、地方創生に向けたさまざまなチャレンジに取り組んでいます。

2018年4月には、町の交通ネットワークの拠点となる「上士幌町交通ターミナル」がオープンしました。路線バスをはじめ、コミュニティバスやタクシーが集まるハブ拠点となることで、交通のさらなる利便性向上を図っていきます。

5月には観光地域商社(DMO)として「㈱Karch(カーチ)」を設立。旅行・宿泊などの観光事業やバイオマ

ス由来の電力小売事業などを手掛けています。2019年にはナイタイ高原牧場ナイタイテラスが、2020年には道の駅もオープンしました。観光を地域の新たな稼ぐ仕組みとし、雇用創出にもつなげていきたいと考えています。

2020年からは、第Ⅱ期の総合戦略がスタートしました。行政、事業者、住民など様々な組織や企業との連携・協働を基本に、起業支援などの人材育成、都市部などから人やものの流れを還流させる関係人口の創出、拡大、高速大容量通信システム5Gを基盤としたAIなど次世代高度技術の活用による産業振興や生活利便性の向上など、新たな視点に重点を置いた対策を進め



▲ナイタイ高原牧場



▲2020年6月にオープンした「道の駅かみしほろ」

ていきます。

「地方がどう元気になるか」——これはすべての自治体にとっての課題です。そのためには、さまざまな世代の方に住んでいただくことはもちろんですが、より魅力あふれるまちづくりをしっかりと進めていかなければなりません。

上士幌町は、地方は自分らしい豊かな生き方ができる場所であること、そして多くのチャレンジができる場所であるということ、これからも発信していきます。

上士幌町長 竹中 貢  
(平成30年6月18日付第3043号)  
(令和2年6月加筆修正)

▶ イメージキャラクター美郷の「ミズモ」 in 美郷町ラベンダー園

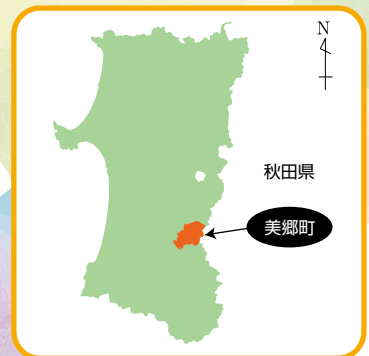


# 初夏に雪の結晶「雪華」が 咲くまち

② 教育・伝統文化・スポーツ、少子・高齢化対策、子育て・医療・健康福祉

## 秋田県 美郷町

みさとちょう



### 美郷町の概要

美郷町は、秋田県南部に広がる仙北平野の南東部に位置しており、東は奥羽山脈を境に岩手県に、南は横手市、北・西は大仙市にそれぞれ接しています。

奥羽山脈の麓、豊かな湧水と土壌に恵まれた県内有数の穀倉地帯であり、田園の風景に四季を感じることができ自然豊かな美しい町です。また、美郷町は、清水の町でもあり、町内126カ所で水が湧き出しています。その半分以上は六郷地区(旧六郷町)に集中しており、湧水は環境省の「名水百選」、国土交通省の「水



▶ 美郷町ラベンダー園、美郷雪華。



の郷百選」、林野庁の「水源の森百選」に選ばれた名水です。その名水を使った地酒、流しソーメン、ニテコサイダーは名水のおいしさを存分に味わえる一品です。

ホワイトラベンダー  
「美郷雪華」

初夏の美郷町ラベンダー園には白色のラベンダーが咲き誇ります。それがホワイトラベンダー、美郷町オリジナル品種「美郷雪華」です。「美

▶ 「美郷雪華」コレクションの品々



郷雪華」は、東北でも有数の規模を誇る美郷町ラベンダー園で発見されました。平成25年に品種登録され、美郷町がオリジナル品種を保有することになりました。

香りはラベンダー特有の爽やかさを有しながら、優しく可憐な甘さを感じることが出来ます。「美郷町の初夏に美しい雪の結晶、雪華」が見られるように」との思いから名づけられた「美郷雪華」。初夏のラベンダー

園では紫色と白色の美しいコントラストを楽しむことができます。近年はその白いラベンダーの評判を聞き県外から訪れる観光客も年々増加しています。

また、美郷雪華の花より採取された酵母「美郷雪華酵母」を使った日本酒や、美郷雪華から真空低温抽出法で抽出したフローラルウォーターを使用したルームフレグランスも商品化され、お土産としても大変好評です。

水でつながった  
航空会社『JAL』

ホワイトラベンダー「美郷雪華」、美郷町の「清水」は、平成25年に連携協力協定を結んだ、日本航空㈱（JAL）発行の雑誌『SKYWARD』にも取り上げられ、美郷町を知っていただく機会も増えています。JALとの連携は、双方が所有する資源や機能等を活用することで相互の理解を深め、環境保全活動の推進と地域の活性化等を図ることを目的としています。

連携事業の内容は、JAL本社から社員の方々が来町し、水環境保全

▶ 「空育」の折り紙ヒコーキ教室に興味津々



キャンプとして、住民と協力して水の清掃活動を年1回行っているほか、冬の降雪時期には地域貢献活動キャンプとして高齢者世帯の除雪活動を行っています。

このほか、水資源の根幹をなす水源涵養林の保全活動として町が行っている植樹活動への参加、町の観光資源ラベンダー園の空港PR、園児を対象とした「空育」折り紙ヒコーキ教室」の開催など、JAL社員と

美郷町民との直接交流を中心とした連携事業を行っています。

また、こうした機会に社員の皆さんが来町し、本町の観光資源や地域特産品などの情報を得て、広く発信していただくことで、新たな観光需要創出を図り、地域全体の活力向上を目指しています。

### 「ゴホンといえば龍角散」 創設者は美郷町出身!!

美郷町は(株)龍角散及び(公社)東



▶ コウボク薬樹の森植樹事業

▶ 「生薬の里」実現に向けた薬樹の森づくり活動



京生薬協会と生薬の国内栽培体制の確立のため連携協定を締結しています。

美郷町の基盤産業は稲作を中心とした農業ですが、農業者の高齢化や担い手不足による休耕農地の増加が懸念されており、農地の有効活用による農業所得の向上を図るため、新たな農産物による産地化を模索していました。

高齢化社会の進展により漢方薬の

需要の伸びが見込まれることや、原料となる生薬は、その大半を中国に頼っており「第二のレアアース化」が懸念されていること、また、かつて美郷町(旧六郷)でカンソウが栽培されており、秋田藩内に広められた史実があることや、「ゴホンといえば龍角散」の(株)龍角散の創設者が美郷町出身であることに着目し、生薬を新たな農産物として産地化を目指すため「生薬の里美郷」構想を立ち上げ、平成25年2月に連携協定を締結しました。

現在、美郷町で取り組んでいる薬用植物は、カンソウ、キキョウ、エイジツ、コウボクの4種で、カンソウ、キキョウ、エイジツの3種は町試験圃場と町内の薬用植物栽培に興味のある農家の圃場で本格栽培に向けた試験栽培を行っています。コウボクについては町有林地に平成26年度から毎年100本の植樹を行っており、これまで400本が植樹されました。今後は、生薬栽培に取り組み農家の拡大と医薬原料の基準となる薬効成分向上、各品目の地域に合った栽培方法と安定的な出荷生産体制の確立、新たな栽培品目の拡大などに取

り組んでいく予定です。

### 美郷町から2020年 東京オリンピックへ

まちづくりの中で、特に力を注いでいる取組の一つに、2020年東京オリンピックに向けたタイ王国と美郷町との交流活動があります。

タイ王国と美郷町の交流のはじまりは、平成27年4月、タイ・ナシヨ



▶ タイ王国バドミントンナショナルチームによる美郷中学生へのバドミントンクリニック



◀ タイ王国バドミントンナショナルチーム  
美郷町合宿風景



ナルジュニアバドミントンチームが当町で合宿をしたことが契機となっています。この合宿の練習会場は平成19年に秋田県で開催された第62回国民体育大会「秋田わか杉国体」のバドミントン競技の会場であった美郷総合体育館「リリオス」でした。

また、宿泊施設は学校統合により廃校となった旧仙南東小学校を改修・整備し、平成27年4月にオープンした宿泊交流館「ワクアス」を提供しました。

この合宿により当町の練習環境が評価され、タイ王国において平成27年8月、タイ・バドミントン協会、秋田県、秋田県バドミントン協会、そして美郷町の4者による「相互の交流キャンプに関する基本合意書」を締結しました。こうした取組を経て、秋田県と美郷町は平成28年1月、2020年東京オリンピック「タイ王国」の「ホストタウン」として登録されることになりました。

また、平成29年7月にはタイ王国に



▶ 駐日タイ大使（右から2人目）来町（ワクアス内にて）

▶ タイ・バドミントン協会と「事前キャンプに関する基本合意書」の締結



において、タイ・バドミントン協会、秋田県、秋田県バドミントン協会と2020年東京オリンピックの「事前キャンプに関する基本合意書」を締結。同年9月には、タイ王国ナショナルチームが当町で合宿を行っております。

こうした経緯の過程においては、平成28年6月、美郷町長がタイ政府並びにタイのスポーツ庁を訪問するとともに、同年8月には駐日タイ王国特命全権大使バンサーン・ブンナーク閣下が来町され、美郷総合体育

館「リリオス」、美郷町宿泊交流館「ワクアス」などを視察されました。

当町では、これまでバドミントンを通じたタイ王国との交流や取組を主に行ってきましたが、同国の「ホストタウン」として、文化的な面での取組も行うことで住民の機運をさらに高めることを目的に、平成29年10月1日から10月31日まで「タイ王国文化展」を美郷町学友館で開催しました。この展覧会では、在東京タイ王国大使館並びにタイ国政府観光庁東京事務所のご後援、国立民族学博物館の特別協力をいただき、各機関から提供していただいた資料約200点を展示しました。

## 最後に

こうした国内外を問わない取組を通じて、各地域共通の課題である人口減少に對峙するとともに、町民が自らの町「美郷町」に誇りを持っていただくよう、今後も各般にわたる取組を重ねてまいります。皆様には秋田県美郷町への応援をよろしく願っています。

秋田県美郷町

（平成30年6月4日付第3042号）

# 真鶴町と美の基準

「変えない」が価値となる共通言語



真鶴の港を上から望む風景

2 教育・伝統文化・スポーツ、少子・高齢化対策、子育て・医療・健康福祉

## 真鶴町の概要

真鶴町は、神奈川県南西部に位置し、南北に約7km、東西に約1km、人口7,344人(平成27年国勢調査)の小さな港町です。箱根火山の南東側外輪山麓と、相模湾に突き出した小半島から構成されています。

黒潮が流れ込み、冬でも暖かい風を生む相模湾に向かって傾斜する町土ですが、陽光をさえぎるものは無く、豊かな緑が澄んだ空気を作り出しています。半島部分と東部の新島高地との間に広がっている南東斜面が真鶴町の中心となっており、この地域は、さらに小起伏により、真鶴地区と岩地区に分かれています。

こうした美しい町並みが、永きにわたって港の町の歴史を培ってきました。

## 神奈川県 真鶴町

まなづるまち



## リゾート法施行

真鶴の港を上から望むと、港を中心にすり鉢状に建物が広がっています。屋根の色はさまざまですが、地形に沿って家が並び屋根も地形にそった形をしています。大きなマンションが空に突き出したりはしていません。さらにひとつひとつの家と家の間をよく見ると、そこには緑があり、どこか安心で、懐かしい風景が今もなお残っています。

しかし、この風景が壊れてしまいかもしれない出来事がありました。それが「リゾート法」の施行です。近隣の市町で次々とマンションが立ち並び、真鶴町にもこの波が押し寄せてきました。地価がどんどん上がっていく中で、多くは人が住むためではなく、投資目的の建設が多かったそうです。





▲美の基準の冊子

そして、この時一番の問題だったのが「水」でした。もともと水源に乏しい真鶴町は、隣町から一部の水を供給していたため、町民は、マンション建設により人口が増えることで、さらに水が不足し、日常の生活が崩れてしまうのではという大きな不安を抱いていました。

### まちづくり条例の誕生

その中で当時、リゾートマンション建設反対派の町長が当選しました。就任3か月の速さで制定したのが「給水

規制条例」で、「ある一定規模以上の開発に対して新たな水の供給を行わない」というものでした。そして次の対策として行われたのが、美の基準を含むまちづくり条例の制定でした。

りするときに、事業者が町や町民と話し合い、合意にいたるまでのルールを定めています。話し合いを重ねることで、互いの意見に寄り添った建物が建つのもまちづくり条例の特徴です。

まちづくり条例は3つの柱で構成されています。

1つ目は、「土地利用規制規準」。

土地の利用方針を、真鶴町の特徴や地域の状況に合わせて細かく定めていくものになっています。

2つ目は話し合いのルールを定めた「建設行為の手続き」です。

建物を建築したり、土地を造成した

さ而定めた『美の基準』。

この美の基準はBEAUTIFULの美ではなく、真鶴の「FE」を言葉にして集めたものになっています。この美の基準をつくるにあたっては、建築家、弁護士、都市計画家に協力を仰ぎました。その際に参考にしたのは、クリストファー・アレクザンダーが提唱した『パターン・ランゲージ』、チャールズ皇太子の『英国の未来像ー建築に関する考察ー』、そして条例制定前の1989年度に行われた住民による地域資源の掘り起こしイベント「まちづくり発見団」の成果（報告書）です。これらを活用し、固有の美を拾い上げ作り上げてきました。

### 美の基準

では、美の基準を詳しく説明していきます。美の基準は1冊の本にまとめられています。ページを開くと「本デザインコードは、町、町の人々、町を訪れる人々、町で開発をしようとする人々がそれぞれに考え、実行していくべき小さなことからひとつひとつ綴っています。」という言葉があり、

そしてさらにページをめくっていくと8つの基準が書かれています。

◇**場所** 建築は場所を尊重し、風景を支配しないようにしなければならぬ。

◇**格づけ** 建築は私たちの場所の記憶を再現し、私たちの町を表現するものである。

◇**尺度** すべての物の基準は人間である。建築はまず、人間の大きさと調和した比率をもち、次に周囲の建物を尊重しなければならぬ。

◇**調和** 建築は青い海と輝く緑の自然に調和し、かつ町全体と調和しなければならぬ。

◇**材料** 建築は町の材料を活かして作らなければならない。

◇**装飾と芸術** 建築には装飾が必要であり、私たちは町に独自の装飾を作り出す。芸術は人の心を豊かにする。建築は芸術を一体化しなければならぬ。

◇**コミュニティ** 建築は人々のコミュニティを守り育てるためである。人々は建築に参加するべきであり、コミュニティを守り育てる権利と義務を有する。

◇**眺め** 建築は人々の眺めの中にあり、美しい眺めを育てるためにあらゆる努力をしなければならぬ。

そして、8つの原則の中に、69のキーワードがおさめられています。いくつが紹介しているかと思えます。

キーワード	前提条件	解決法	課題
○静かな背戸	真鶴のイメージを一層引き立てているもののひとつに、静寂な場所「静かな背戸」がある。細い裏道でつながれた山際の背戸は、とても静かに人を迎えてくれる。また斜面の起伏に沿ったり、よぎったりするこの背戸は、微妙な光や風景を演出してくれる。賑わいの中や、人だらけの喧騒の中で働く者にとって自然な状況で静かに散策できる場所は魅力的である。	賑わいを演出した建物の背後には、騒音から逃れた「静かな背戸」を用意すること。既存の小さな裏道を大切に扱うこと。「静かな背戸」は優しい光が降り注ぎ、騒音から壁や距離や建物で守られるよう、見通し、風景、自然の生態系等を保全し、それらが生きづくよう演出すること。	・静かな背戸のネットワークづくり ・静かな背戸写真集づくり

●静かな背戸 曲がりくねった細道は陽光が降り注ぎ、とても静かである。

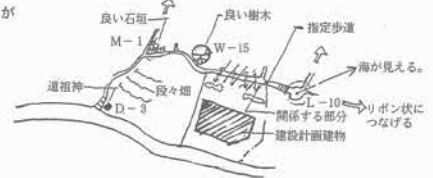


●静かな背戸 所処で森のプロセニア越しに青い海が見える。



○静かな背戸のネットワークの例

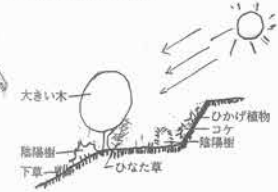
●計画敷地と「静かな背戸」が関係する部分



●大切なものを大切に 良い樹木は積極的に保存する



●静かな背戸の生態系



●きめ細かく



●美しいものに敏感であれ



●静かな背戸

美の基準のキーワードは前提条件、解決法があり、事例写真や絵で構成されています。

静かな背戸の前提条件を紹介したいと思えます。

前提条件では静かに散策できる場所という背戸道の要素や特徴を示しており、解決法において、建物により騒音から背戸道が守られたり、自然の生態系を保全し、それらが生きづくよう演出したりすることを求めています。

●実のなる木

真鶴町は、柑橘業が盛んな場所であることから、町のいたるところに蜜柑の木や檸檬の木が植えられています。この豊かな象徴として美の基準でも



▲貴船まつり

「実のなる木」というキーワードで綴られています。

●豊かな植生

真鶴町には「お林」とも呼ばれる真鶴半島自然公園があります。樹齢350年以上と言われるクロマツやクスノキ、スタジイ等の巨木や多くの植物が生い茂っています。

いくつもの遊歩道があり、野鳥のさえずりに、森林浴や自然観察を楽しむことができます。

また、お林の「照葉樹林」は、魚を育てる森と言われ大切に守られてきました。神奈川県天然記念物に指定されています。

●まつり

毎年7月27日、28日の両日、日本三



キーワード	前提条件	解決法	課題
〇眺め	美の基準をすみずみまで浸透させ、自然、建物、生活、文化、一人ひとりを生き生きとさせて行くのは大変な努力と長い時間がかかる。	真鶴がいつか自然と人のユートピアとなるよう願うこと。美しい世界を一人ひとりが具体的に想像すること。美しく豊かな眺めはそれぞれの心から創られる。	



▲美の基準キーワード「眺め」

大船まつりとして国指定重要無形民俗文化財に指定されている「真船まつり」が開催されます。豊漁・無病息災を祈願する真鶴伝統の祭礼です。小早船や神輿の海上渡御、鹿島踊り奉納など豪華と伝統を兼ね備えており、華やかに飾り付けられた船が海を渡る姿は祭りの花形となっています。このように真鶴町の文化が綴られているのも美の基準の魅力のひとつでもあります。

建築基準法とのズレ

まちづくり条例が施行後、ある問題が起こりました。岩のある敷地でマンション計画があり、建築基準法上では違反にはならないが、まちづくり条例では違反になるという相互のズレが生じる案件がありました。その相互のズレをなくすために景観法を策定し、まちづくり条例を中心とした景観づくり、緑の保全・育成、観光振興との連携、公共施設からの景観形成など、多様な主体との一体的な推進を今後重視する景観づくりとして明確に示しました。

「変えない」が価値となる

美の基準ができて約25年。この美の基準が今ひとつの価値となってきました。この美の基準の魅力を知り、移住者が増え、その移住者がSNSなどで

を通じて魅力を発信したことで美の基準がたくさんの人に知られるようになりました。

リゾート法が施行され、変えないことを選んだ真鶴町は、今その価値が少しずつ若い人たちから共感を得るようになってきました。

これからの美の基準

美の基準の69のキーワードは現在までひとつも変わらずに継承されてきました。そして69番目のキーワードの「眺め」はこんな解決法になっています。

真鶴町がいつか自然と人のユートピアとなるように願うこと。

美しい世界を一人ひとりが具体的に想像すること。

美しく豊かな眺めはそれぞれの心から創られる。

美の基準は真鶴町にとっての「共通言語」になっています。その共通言語をよりたくさんの人に知ってもらうことが、これから重要になってくると思います。共通言語があるからこそ対話が生まれ、新しいカタチが生まれ、それがまた価値となる。そんな美しいサイクルがこれからも引き継がれていくことを確信しています。

真鶴町長 宇賀 一章  
(令和元年9月30日付第3005号)

護摩堂山からの蒲原平野



# 暮らしを磨き夢を導く

## その先の輝きへ々々を目指して

② 教育・伝統文化・スポーツ、少子・高齢化対策、子育て・医療・健康福祉

### 田上町の概要

田上町は、県都新潟市の南東に位置する人口約12,000人の町です。東側は森林地帯、西側は田園地帯として信濃川に囲まれています。

町の中央部には、南北に走るJR信越本線と国道403号のほか、全面開通はしていませんが新潟市へ直接つながる403号バイパスの整備が進んでいます。JR線は羽生田駅と田上駅の二駅があり、新潟駅までは約35分。北陸自動車道「三条・燕IC」から13km、磐越自動車道「新津IC」から10km、上越新幹線「燕三条駅」から13kmという場所に位置し交通アクセスには非常に恵まれています。

また自然の恵み豊かな町でもありません。農産物では米はもちろん、桃、梅

## 新潟県 田上町

たがみまち



竹の子などの特産品があります。

湯のまち田上町には、開湯から二百七十余年という歴史を持つ湯田上温泉があります。豊かな効能により、古くは「薬師の湯」と呼ばれ多くの湯治客から親しまれていた湯処です。

近代的な温泉郷に生まれ変わった現在も、旧温泉街には昔を偲ばせる風景が点在しています。毎年6月下旬から7月中旬には、その旧温泉街を舞台にアーティストやコレクターの作品を展示し、まち歩きをする「湯のまち巡り」というイベントが行われています。

田上町は明治34年11月1日、羽生田村、保明村、横場村が合併して現在の行政区域となり、地の利の良さから住宅適地として転入世帯が急増し、これを契機として昭和48年8月1日に現在の姿となりました。



人口減少と少子高齢化の深刻化

町の人口は平成12年の13,643人をピークに減少傾向が続いています。国立社会保障・人口問題研究所の人口推計では2060年までに人口が半分以上に減少するとされています。現状は、出生数の減少もさることながら、20代女性の転出が多くなっており、過去5年間の人口動向をみると、転出先のほとんどが、県内では新潟市、県外では東京圏となっています。

このような人口減少と少子高齢化の進行は、生産年齢人口の減少による経済活力の減衰や年金、医療、福祉などの社会保障費の増大など、まちづくりの根幹に関わる重要な問題につながります。

このため各年齢層に見合った福祉・教育サービスの見直しをはじめ、子育て

環境の充実、雇用対策の推進などにより地域の活力を維持向上させ、定住人口はもとより交流人口の増加を図り、より良いまちづくりを目指して次のような取組を行っています。

少子化・定住対策の取組

町では平成27年度に「田上町総合戦略」を策定し人口減少に歯止めがかかるよう各事業を実施しています。

まずは住環境の整備として、

- ① 「新婚・子育て世帯向け個人住宅取得資金利子補給金」を創設し、町へ定住することを促進するため、新婚世帯（婚姻後5年以内）又は子育て世帯（中学校3年生以下の子どもがいる世帯）で住宅を取得した場合に住宅ローンの利子に対して年10万円を上限として5年間給付します。こ



▲田上町はあじさいの名所として有名です

の給付金制度の受給者は年々増えています。

- ② 「新婚世帯家賃支援事業」は若年層の新婚世帯の定住促進を図るため、町内の賃貸住宅へ入居した場合、補助金を交付します。毎月1万円を最大3年間(36ヶ月間)補助しています。

- ③ 「多世帯同居住まい推進リフォーム事業補助金」は、新しい取組として平成29年度に創設。町民の生活環境の向上のほか、定住促進を図るため、既存住宅で多世帯同居をするためのリフォーム工事を行う方に必要な経費の半分の補助をしています。補助対象工事費に対して50万円を上限としています。

対象者は新たに多世帯同居を開始する方、又は多世帯同居の世帯人数が1名以上増加する場合となります。新規に取り組んだ事業ではありません。



▲町の売却遊休地

- ④ 「世帯向け民間賃貸住宅建設事業補助金」は世帯向け賃貸住宅を町内に建設（新築又は建替え）する場合にその所有者となる個人または法人の方に、賃貸住宅建築工事一式及び外構工事に要する経費に対して500万円を上限として補助をしています。田上町には従来から、学生用の賃貸住宅は多くありましたが、子育て世帯が住める広さの賃貸住宅は町内にはあまりなかったため、若年層の新婚世帯の転入に繋がればという思いで事業を創設しました。
- ⑤ 移住・定住対策の一環及び町の遊休地の売却を兼ねて、移住・定住希望者に対し、町有地の制限付き一般競争入札を行っています。入札参加資格は、契約を行った日から2年以内に住宅を建設し、住民登録を行うことなどを条件としています。

▶湯の町めぐり



単なる町有地売却では、移住・定住に繋がらないため、最低売却価格を安価に設定し入札を行った結果、一部の土地は契約を行うことができませんでした。しかしながら全ての物件が契約に至っていないため、土地売却の制限付き一般競争入札は今後も継続していく予定です。

### 子育て支援事業

次に子育て支援では、子育てしやすい町を目指して、

- ①「乳幼児育児用品購入助成」を創設しました。子育てをしている家庭の経済的支援として一月あたり2千円の助成券を発行しています。
- ②「子どもの医療費助成」は従来から



出張にここ広場

助成を行ってましたが、平成29年度から助成範囲を拡大し、入院・通院とも高校卒業まで助成することになりました。

③「子育て支援センター」は町内にある竹の友幼児園内に設置されています。親子のための遊び場の提供や親同士の情報交換、仲間づくりの場の提供を行っています。子育てに関する悩みや問題解決をするため、専門スタッフによるアドバイスや育児相談講座の開催、子育て支援に関する情報提供を行っています。近年では「出張にここ広場」として地域に訪問して育児相談も行っていきます。

### 移住促進事業

#### 「プロモーションビデオ」の作成

町へ移住をしていただくにも、全く知らない地へ移住することは難しいと思います。そこで、まずは田上町の知名度を上げること、町がどんなところか、どんな生活を送れるところなのかを知っていただくために、プロモーションビデオを制作しました。

プロモーションビデオには、実際に田上町へ移住されたご家族のインタビューや町の子育て支援に関する内容も含んでおり、少しでも田上町での生活をイメージできるように心がけて制作しました。この動画を観て田上町へ移住していただくきっかけとなって欲しいと思っています。このプロモーション



▲プロモーションビデオの一場面

ビデオはYouTubeでご覧いただくことができます。

また、就労環境の創出も大切なことです。移住を希望されても働く場所がなければ生活ができないことから、町の産業振興及び雇用創出の拠点として期待される「本田上工業団地」への企業誘致を進めています。

今までは工業系企業の誘致を目標に販売を進めてきましたが、多様な就業スタイルに対応するため商業系企業にもアプローチを行い雇用の場の創出を行っています。

### 成果と今後の課題

田上町は国の「人口問題対策における提言」以前から少子化対策推進室を設け、人口減少と少子化対策への取組を行ってきました。現在は政策推進室

となり、総合計画及び総合戦略など一元的に行っています。少子化・定住対策のサービス数も増えてきていることから、社会動態では数値に一定の成果が見られるようになってきているところです。ただ、平成27年度に策定した「田上町人口ビジョン」で設定を行った目標人口より、現時点では数値を上回っている状況ですが、自然動態では、なかなか成果が見られないところが実情です。

田上町総合戦略の計画期間は平成31年度までですが、この期間を待たずに効果の薄い事業については改訂や廃止または、新規の事業を追加するなど、違ったアプローチの施策を行うていくことが必要であると考えています。

### 最後に

田上町総合戦略では「暮らしを磨き夢を導く田上」その先の輝きへ」をスローガンに掲げ、このような各種施策を展開しています。それらの施策により町民の「暮らし満足度」を高めていくことで、人口が定着し町の魅力も高まっていくことを期待しています。そして町の魅力が高まることで、観光をはじめ交流人口が増加し自ずと転入・移住者が増えてくる好循環のまちづくりを目指していきます。

田上町長 佐藤 邦義

(平成30年4月23日付第3003号)



▼遠隔合同授業



# 人口減少に立ち向かう村 遠隔教育をはじめとする ICTを活用した教育の取組

## 喬木村の概要

喬木村は長野県の南部、伊那谷を南北に流れる天竜川の東岸に位置し、河岸段丘上にあります。人口6,369人（平成31年3月31日現在）で、村内には保育園3園、小学校は喬木第一小学校（児童数313人、以下第一小）と喬木第二小学校（児童数47人、以下第二小）の2校があり、児童は第一小に隣接する喬木中学校（生徒数195名、以下喬木中）に進学します。村全体の少子高齢化も深刻な課題ですが、特に第二小学校区では児童数の減少が急速に進行しています。

人口減少対策が喫緊の課題となる

## 長野県 喬木村

たかぎむら

■リニア中央新幹線と喬木村の位置



▲図1 リニア新幹線でつながる都心と喬木村

一方で、リニア中央新幹線が開通すると、東京から45分、名古屋から25分、また浜松と中央道を結ぶ三遠南信自動車道路が開通すれば、浜松から90



分で結ばれるなど、利便性の向上や人口流入が期待されています(図1)。

喬木村では文部科学省実証事業「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」(平成27~29年)の採択を端緒に、地域創生の施策の一つとして「教育」を位置付け、「子育ての村・喬木村」として「教育」を村の魅力として発信し、移住定住の促進にもつなげていこうと、最先端のICT機器の整備を進めています。伝統が息づく自然豊かな村の風土を最大限活用しながら、ICTを効果的に教育に取り入れることで、未来を生きぬき、次代を担っていくリーダーの育成を目指し取組を進めています。

### ICTの導入の契機

中山間地域に位置し、児童数の少ない第二小は、「学級内で交流する個性が限られてしまう」「リーダーシップのある児童の意見に左右されやすい」「考え方が固定化される傾向がある」などの教育的課題を抱えています。第二小を維持しつつ、このような課題を解決するため、平成27年度

より文部科学省の実証事業「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」に応募し採択を受けました。小規模校である第二小と第一小を遠隔会議システムで結び、多様な他者と交流し、さまざまな考えに触れることができる合同授業を行うことで、課題解決を目指しました。本取組は、実証事業を終え、村独自の体制になった現在も継続しています。

また、小学校での実証事業の開始に伴い、中学校へのICT機器の整備も行いました。小・中学校間のスムーズな引き継ぎに考慮し、小学校で培ってきた経験を存分に発揮するため、中学校には全普通教室への電子黒板の配置のほか、生徒一人一台のタブレットPCを、ふるさと納税による税収を活用し導入しました。

以上のように、本村における教育へのICT機器導入の契機は、小規模校の課題解決を目指したものでしたが、その根底には、ソサエティ5.0の時代を生きぬく子どもたちのための教育環境を実現しなければいけない、という首長の強い願いがあります。AI技術やロボット産業の発

展により、予測困難な社会が到来します。学校教育においてもICTを学習手段の一つとして使いこなし、生涯学び続ける力を育成していかなければいけません。新学習指導要領で示された目指すべき教育の在り方においても、ICTが整備されている環境があることが前提となっています。

リニア新幹線などの高速交通網の発展やテレワークの導入といった働き方の変容を鑑みれば、勤務地を都会に置きながら本村のような自然豊かな中山間地域を居住地とする生活を選択することへのハードルも低くなっていくことが考えられます。そのような働き方を選択し移住のニーズがある層にとっては、移住先の条件として教育環境の充実を求める割合も決して低くないはずです。伝統が息づく豊かな自然に囲まれながら、先端技術による未来を志向した教育を受けられる本村へ、「子育てをするなら喬木村」と移住を判断していただけの魅力ある教育環境づくりに急務であると考えています。そこで、村の施策の一部としてICT活用による教育の振興を位置付け、

首長部局と教育委員会事務局が連携をとって現在まで取組を進めています。

### 学校による取組の実際

#### ・小学校「遠隔合同授業」

現在、第一小と第二小の遠隔合同授業は両校のパソコン教室を改装した「アクティブラーニング教室(以下、AL教室)」で行われています。AL教室には、テレビ会議システム(カメラやスピーカー、マイク、大型モニター等)や電子黒板、児童用タブレットPCなどが常設されています。遠隔システムは、大きく分類して次の三つの構成でできています。

一つ目は、連携映像音声システムです。AL教室には、教室正面から児童の様子全体を捉えるカメラと、教室後方から教員や発表者を捉える2台のカメラが設置されています。ズームしなくても相手校の児童の顔を把握することができる解像度なので、カメラを頻繁に操作する必要がありません。また、話している児童もわざわざカメラの前に出てきたり、マイクの近くに寄りたりせず、自分





▲図2 遠隔合同授業の様子

の席で普段と同じ音量で話せば、相手に音声が届きます。モニター越しではありますが、同じ教室にいるかのように、普段通りの先生と児童のやりとりが行えます。

二つ目は、連携電子黒板システムです。これは、片方の電子黒板で映し出している資料や書き込み内容と同じものが、相手校の電子黒板にもリアルタイムで映し出されているという、画面共有機能のことを指します。

三つ目が、連携学習支援システムです。児童用のタブレット端末に課題を送信したり、児童がそれぞれタブレットに書き込んだ内容を電子黒

板上で一覧表示できるシステムです。

システム上の名簿は、第一小・第二小を合わせた合同クラスとして編成してあるので、第二小の先生が配信した課題は同時に第一小の児童にも届き、電子黒板には両校の児童のタブレット画面が一覧表示されます。

連携電子黒板と連携学習支援システムがあることで、離れた二つの教室にいても、まるで同じ教室で授業しているかのように同じ板書や資料をみて意見を言い、電子黒板に一覧表示された多様な考えをもとに議論をすることができ（図2）。

このような学習形態のほかにも、タブレット端末で遠隔グループ学習にも取り組めるような環境を整えて



▲図3 海外との交流の様子

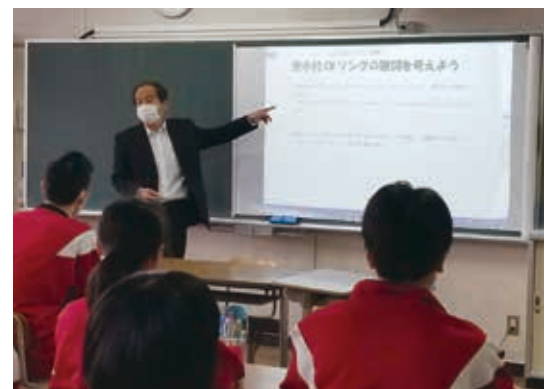
います。さらに平成30年度からは、A1室で行う第一小と第二小の遠隔合同授業だけでなく、普通教室で簡易につなげられる遠隔システムを使い、他県や海外の学校と合同授業を行う取組も始めています（図3）。

・中学校「一人一台のタブレットPCの活用」

喬木中では、生徒一人一台のタブレットPCと全普通教室への電子黒板、そして教員にも一人一台の授業用PCを整備しました。平成27年度に整備が始まったことをきっかけに、学校が主体となり授業改善の取組を行ってきました。

最初の1年目は、教員のICT活用力の向上を目標に、電子黒板やデジタル教科書を活用して「わかりやすい授業」を実現していきました。電子黒板上にデジタル教科書を提示し、ズームして資料を大きく写したり、書き込みをして重要な箇所を強調したりすることで、生徒の理解を促し、知識の定着を図りました。教員が教材を自作し、授業で活用する場面も多くみられました（図4）。

2年目は、生徒が主体的にタブレッ



▲図4 中学校 教員のICT活用

トPCを活用しながら学習を行っていくことを目標に、授業支援ソフトやOffice系のソフトを活用し「協働的な学び」の実現を図りました。自分の考えや調べたことをまとめたデジタルノートをクラス内で共有し、ほかの友達を考え方を参考にしながら、さらに深く考えたりディスカッションを行ったりする授業や、学んできたことをプレゼンテーションとしてまとめ発表するような授業が展開されました。

そして、3年目には、長野県のICT活用パイロット校に指定され、長野県ICTシンポジウムという県の公開研究会を行い、県内外から



▲図5 中学校 生徒のICT活用

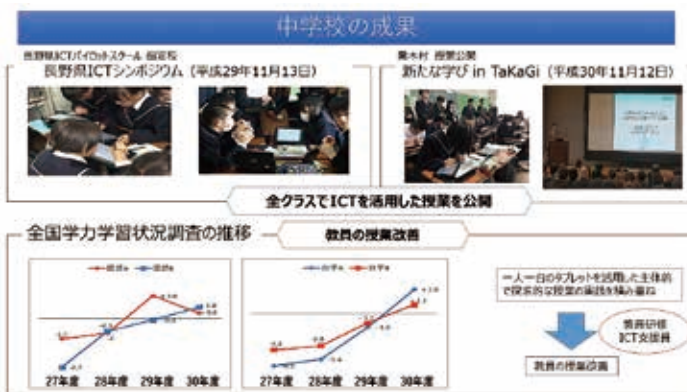
300名余りの教育関係者にお越しいただきました。すべてのクラスで生徒がタブレットPCを活用した多様な授業を公開し、その学びの成果を全国にむけて発信することができました(図5)。

このようなICTの環境整備に伴う授業改善は学力の向上にも寄与しています。全国学力学習状況調査の全国平均との差を比べた結果の推移をみると、ICTの導入が決まった27年度から現在に至るまで、全体的に上昇傾向にあります。これは、ICTを導入したことで生徒の学力があがったという単純な因果関係ではありません。機器の導入に伴い、先

実証事業として取り組んだ遠隔合同授業では、小規模校の児童において、学びの広まりや深まりが実感されたことが実証されました。平成29年に行った児童対象のアンケートで

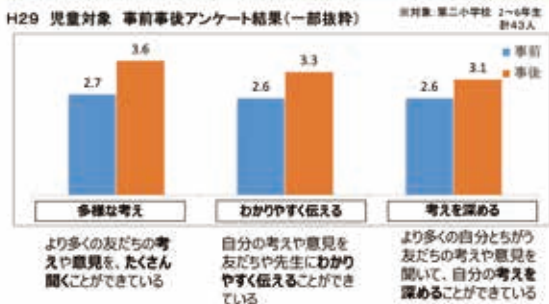
### 現状と今後の課題

生主導の講義式の授業から生徒主体の協働的な学習へ先生方の授業改善の取組が始まり、それが年々結果として表れているのです(図6)。



▲図6 中学校における成果

### 遠隔合同授業の成果: 独自アンケート調査結果より



⇒遠隔合同授業を経験した児童が、多様な考えに触れたこと、それにより自分の考えが深められたことを実感

▲図7 遠隔合同授業の成果

は、遠隔合同授業を経験した児童が、多様な考えに触れたこと、それにより自分の考えが深められたことを実感しているという結果が出ました。普段は、数名の友達の見聞や考えを聞く機会しかない第二小の児童も、遠隔合同授業をすることで30人規模のクラスの中で授業をすることで同様の情報量を得ることが出来ます。多様な情報を整理・比較・分析していく授業が小規模校においても経験することが可能になりました。

また、第一小の児童アンケートからは、「いつもと違う友達の意見が聞けて面白い」「第二小は人数が少ない

今後は、すでに導入され5年を迎えようとしている機器の更新を考えなければいけない等の課題もあります。しかし、教育への投資は、未来を創る子どもたちへの支援であるとともに、地方創生の施策として重要な役割を果たすと考えています。よりよい教育環境の実現のためにも、今後も首長部局と教育委員会事務局が一丸となって邁進して参ります。

喬木村教育委員会

(令和元年7月8日付第3008号)



▼お出かけ運動教室に参加された皆さん



# 『お達者』で暮らせる まちづくりを目指して

② 教育・伝統文化・スポーツ、少子・高齢化対策、子育て・医療・健康福祉

## 森町の概要

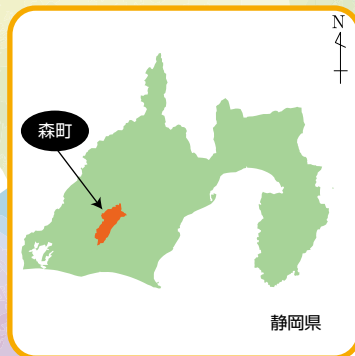
森町は、静岡県の西部に位置し、北は浜松市・島田市、東は掛川市、西は磐田市、南は袋井市に隣接しています。町の人口は18,507人、世帯数は6,528世帯です。(平成30年4月1日現在)

総面積は133.91km<sup>2</sup>で三方を高い山々に囲まれています。

町北部に緑豊かな森林が広がり、その森林を源とする清流「太田川」が町の南北を流れ、この川の流れが肥沃な土壌を生み、中心部から南部にかけて市街地や田園を形成している風情豊かな町です。また、森町は大地の実りに恵まれ、古来より伝統

## 静岡県 森町

もりまち



文化を育みつつ発展してきました。

大正時代、森町を訪れた地理学者・志賀重昂は、山紫水明のこの町を「小京都」と称賛し、以来、森町は「遠州の小京都」と呼ばれるようになりました。

風情あふれる町並み、遠江国一宮として崇敬を受けた古代の森と謳われる小國神社に代表される神社・史跡、また四季折々の花と緑の彩りなど、特徴ある景観、歴史・文化資源があり、年間110万人(平成29年度)に及ぶ観光交流客が訪れます。

また、日用食器、茶器、酒器などの森山焼の産地であり、茶・米とうもろこし・レタス・柿・メロン等、清流太田川とその流域に広がる肥沃な大地で育てられた多彩で高品質な

農作物があります。

交通面では、平成24年の新東名高速道路の開通に伴い、町の東側に「森掛川IC」が、中西部には「遠州森町PA」に併設して「遠州森町スマートIC」が設置されました。2つのインターチェンジを持つ町として、利便性の飛躍的な向上によって交流が盛んになり、さらなる発展が期待されています。

鉄道については、天竜浜名湖鉄道の遠州森駅をはじめ、町内に5つの駅があり、また、JR東海道線や東海道新幹線の掛川駅まで約25分で結ばれています。



▲平成24年4月に開通した新東名高速道路

予算規模は、平成30年度当初予算額で72億1,800万円、特別会計、企業会計を合わせた総額は166億3,800万円で、自主財源比率は49.4%、平成29年度の財政力指数(3年平均)は0.60となっています。

また、平成29年度決算による経常収支比率は89.1%でした。

この森町をさらに元気にしていくために、町民と行政が一体となって進めるまちづくりの指針となる「第9次森町総合計画」を平成28年3月に策定しました。

本計画では「人の輪」「対話」「調和」をまちづくりの基本理念に掲げ、目指すべき町の将来像を「住む人も訪れる人も心とらく森町」と定めています。この計画をもとに、町民一人一人の暮らしの豊かさを高め、外部との多様な交流を広め、次世代につながるまちづくりを進めています。

### お達者度について

平成22年の厚生労働省発表による健康寿命において、静岡県は、男性全国2位、女性全国1位となり、静岡県が独自に算出した男女計では、

全国1位となりました。

静岡県では、健康長寿をさらに推進するため、65歳以上の平均自立期間を「お達者度」として、平成24年から市町別健康寿命を算出しています。このお達者度は、介護を受けたり病気で寝たきりになったりせず、自立して健康に生活できる期間、いわゆる要介護度2〜5でない状態を「自立している(お達者である)」と定義しています。公表を開始した平成21年から平成25年まで5回の発表

### ○森町お達者度の推移

対象年	発表年	男性		女性	
		お達者度(年)	順位	お達者度(年)	順位
平成21年	平成24年	17.38年	14位	21.22年	6位
平成22年	平成25年	18.54年	2位	21.93年	1位
平成23年	平成26年	18.82年	1位	21.44年	4位
平成24年	平成27年	19.49年	1位	22.05年	1位
平成25年	平成28年	18.33年	2位	21.88年	2位
平成26年	平成29年	18.33年	6位	22.43年	1位

### ＜参考＞

### ○健康寿命と「お達者度」の違い

項目	国・健康寿命	静岡県・お達者度
健康の定義	「日常生活に支障がなく、自己生活が可能な状態」	要介護度がゼロ
基準年齢	75歳から	65歳から
公表間隔	3年ごと H25とH27公表	1年ごと H26とH28公表
市町別の算出	×	○

結果によりますと、「お達者度」が長い市町の特徴として、「運動習慣、大豆製品摂取、緑茶摂取が多い。喫煙経験者、肥満該当者が少ない。世代間交流や多世代同居が多い。その他ボランティア活動等の社会活動をする人が多い。」等の特徴が挙げられています。

がありました。その内訳を見ますと、森町の男性では、静岡県下35市中、1位が2回、2位が2回、14位が1回、そして、6回目の平成26年が6位(お達者度18.33年)となっています。同じく女性では、1位が2回、2位が1回、4位が1回、6位が1回、そして、6回目の平成26年が1位(お達者度22.43年)でした。平成24年には、男性、女性ともに1位となり、静岡県が「お達者度」の発表を開始して以来、毎年上位に位置していることから、「健康長寿の町」であるといえると考えます。

静岡県が実施したアンケート調査結果によりますと、「お達者度」が長い市町の特徴として、「運動習慣、大豆製品摂取、緑茶摂取が多い。喫煙経験者、肥満該当者が少ない。世代間交流や多世代同居が多い。その他ボランティア活動等の社会活動をする人が多い。」等の特徴が挙げられています。



「お達者度」が長い要因

静岡県が発表する「お達者度」は、「介護認定の情報」と「死亡の情報」に基づいて算出するため、発表年の3年前の数値によりお達者度が算出されます。たとえば、平成29年発表の数値は、平成26年の数値となります。このため、現在の町の取組がすべて「お達者度」の数値に反映されるわけではありませんので、今まで発表されたお達者度において、森町が上位に位置している理由をはっきりと説明できるものではありません。しかし、静岡県が発表した「お達者度」の長い市町の特徴の視点から森町が「お達者度」の長い要因を考察してみますと、「年間を通して、農林産物の栽培が盛んであり、高齢になっても働く場が多い。お茶農家、お茶販売店（茶商）が多く、日頃からお茶をたくさん飲む習慣、楽しむ文化が根付いている。各種ボランティア活動が盛んである。特定健診等の受診率が高く、健康に対する意識が高い。介護保険の認定率が高いが、軽度者が多く、比較的早い段階からサービ

◀ 週1回のグラウンドゴルフを楽しむ



スを利用し、自立した生活を長く続けている人が多い。」と考えます。

町での取組

森町では、平成18年度から保健福祉課内に地域包括支援センターを設置して介護予防事業に取り組んできました。平成21年度から、住民主体の介護予防、健康づくり、地域づくりの事業に転換するため、介護認定を受けていない65歳以上の方を対象に、介護予防リーダー養成講座を開催しています。そして、養成講座を受講していただいた方々には、「介護予防リーダー（元気もりもりサポーター）」として、地域で「100（いちまるまる）サロン」を自主的に運営していただいています。この「100サロン」は、「1000円持って100歳まで元気！」を合言葉に、参

加料1000円を持って集まり、遊びながらリハビリや頭の体操をしたり、お茶を飲みながらおしゃべりをしたりと、地域の高齢者なら誰でも参加できるといふことで、参加者も口コミで増えてきています。現在、介護予防リーダーは60名にのぼり、5箇所「100サロン」を開催しています。

また、介護予防リーダーも65歳以上の方が多くことから、平成23年度から、ボランティア活動にポイントを付与し、そのポイントに応じて交付金を給付する介護支援ボランティアポイント制度を開始しました。同



▲ はつらつと「ポールウォーク」を楽しむ



▲ 保健師による健康教室

制度は、地域や登録介護保険施設等におけるボランティア活動を対象に、1時間の活動につき1ポイント、1日2ポイントまで付与され、年度内に付与されたポイントは、次年度に申請することにより、1ポイント100円、年間最大50ポイント5、000円を上限に、介護保険料の負担軽減を図るため交付金として給付しています。さらに、平成29年度から、介護保険第2号被保険者を追加し、ボランティア活動の活性化を図っています。

また、平成27年の改正介護保険法により、一次予防事業がなくなりましたが、それまでは、65歳以上で生

活機能低下が心配される方が、仲間と集い、会話やゲームを通して、楽しい一時を過ごす介護予防教室「さわふれクラブ」や脳活性化教室、運動教室の開催をしてきました。

## 今後の取組

町では平成28年度に、今後もお達者度を維持向上させるために、「お達者度維持向上検討委員会」を設置し、「森町お達者度維持向上推進計画」を定めるとともに、町民からスローガンを募集しました。「ご応募いただいた案の中からスローガンを「お達者の笑顔あふれる町づくり」と定め、町民に周知するため懸垂幕を作成し、現在、町の保健福祉センターに掲げています。また、「森町お達者度維持向上推進計画」では、平成34年発表（対象年は平成31年）のお達者度の目標に男性20・0年、女性22・5年を掲げ、重点項目として、「運動（身体機能低下防止）、社会参加・交流（社会性低下防止）、食生活（食・栄養）、健康管理（歯・口腔、健診、禁煙、飲酒、休養、睡眠）」に取り組むことにしました。



▲元気もりもりサポーターによる「かわせみ体操」の披露

### ○重点項目の取組

まず、「運動」では、平成27年度に森町合併60周年を記念して、健康づくりと介護予防のために作成した、ご当地体操「元気もりもりかわせみ体操」の普及啓発に努めていきます。「元気もりもりかわせみ体操」はDVDに収録し、町内全世帯に配布していますので、今後は、町民が集まる機会を捉えて、実施していただくことにしています。また、平成28年度から、運動に特化したボランティアの養成を図るとともに、従来、町の保健福祉センターで実施していた「お出かけ運動教室」や「元気あつぷ運動教室」を町民がより参加しやすい



▲お出かけ運動教室の様子

よう、地域の公民館で開催し、歩いて通える運動教室の開催をしていきます。次に、「社会参加・交流」では、気軽に寄れる居場所づくりや気軽におしゃべりができるサロンの実施をしていきます。次の「食生活」では、緑茶の摂取がお達者度の延伸に寄与しているとされていますので、今後は町の特産品でもある緑茶の摂取、急須で入れた緑茶摂取の推進をしていきます。最後に「健康管理」では、かかりつけ医、かかりつけ歯科医の推進と歯科検診、定期健診の推進をしていくこととしています。

現在、こうした取組が町民に広く

## 結びに

周知されるよう、活動している団体や店舗に対し、「森町お達者度向上活動『認定証』」の交付の準備をいたします。

森町では、平成30年4月現在、65歳以上の高齢化率は32・6%と高く、今後一層高齢者は増え、団塊の世代が75歳を迎える2025年には、38・6%になると予想されています。また、高齢化の進行に伴い、高齢者独居世帯や高齢者世帯の問題も年々深刻化してきています。こうした状況の中、高齢者等ができるかぎり、住み慣れた地域において継続して生活ができるよう、「地域包括ケアシステム」の構築に向け、地域医療の中心を担う公立森町病院との連携の充実を図るとともに、町民一人一人が「森町お達者度維持向上推進計画」の重点項目に取り組むよう働きかけることにより、今後も長いお達者度が維持できるよう努めていきたいと考えています。

森町長 太田 康雄

（平成31年1月28日付第3000号）



▼町内で最も大きく神秘的な秩父池



# 「ほほ笑みあふれる 和のまちづくり」上牧町

子育て世代にとって暮らしやすい  
まちづくりを推進していく

## 上牧町の概要

上牧町は、奈良県の西北部に位置し、面積は6.14km<sup>2</sup>で、東西2.1km、南北3.6kmのほぼ長方形をした町です。北は王寺町、北東は河合町、南は広陵町、そして西は葛下川を挟んで香芝市に隣接しています。大阪中心部から電車とバスを乗り継げば60分以内でアクセスできる、県外への通勤・通学にも便利な立地です。昭和40年代後半には、西大和ニュータウンの開発により、人口が急増し、人口増加率日本一になったこともあります。現在の人口は22,587人（平成30年6月末現在）。のどかな

## 奈良県 上牧町

かんまきちょう



田園風景がありながら、生活に欠かせない商業施設や教育機関などが集まる、生活に馴染みやすい町です。

「上牧」の地名の起こりは、この地帯がゆるやかな丘陵に抱かれ、放牧に適しており、上の牧、下の牧があったところからと推測されます。そのことは「日本書紀」や「続日本紀」によってもつかがわれます。

この地は当時の宮廷人たちの逍遙の地で、しばしばその歩みを止めたというほどです。なかでも南上牧東南丘から井戸ヶ尻に至る眺めは素晴らしく、この辺り一帯の丘はすべて古墳であるといわれています。元亀・天正の戦乱の時代になると、片岡国春氏が下牧に城山しもやまを構え治めています。

したが、天正5年10月、子孫の弥太郎春之の時に、河内国の松永久秀の軍勢により片岡城を追われます。その後、織田信長に反旗を翻した松永久秀の片岡城を攻めるために、明智光秀や筒井順慶らが戦国絵巻を繰り広げるなど、この町は歴史ロマンを感じさせられる地でもあります。

## 歴史・魅力をたどる

### ■片岡城跡

#### 【位置と概要】

片岡城跡は、町北西部の下牧地区に所在し、西方の眼下に葛下川と、南北に延びる交通路が開けた、片岡谷を望む丘陵上に位置しています。

この片岡谷一帯は中世の興福寺一乗院の所領となっており、一乗院方の国民片岡氏が下牧地区の東を流れる滝川一帯の牧山上下庄とともに本拠とした地域になります。片岡城は、片岡国春が室町時代から戦国時代の初め頃に東西に領地を臨む山上に築上した居城となります。

#### 【片岡氏と片岡城】

片岡氏は、大和の内乱の頃では永

享元年（1429年）以降に筒井党

に属していましたが、文明14年（1482年）には越智党の陣営に移りました。明応7年（1498年）に河内・大和の連合軍を率いた畠山尚順に片岡谷を攻められ、当主である片岡利持が自害しています。その後、片岡国春は再興して当主となり片岡城を築きました。松永久秀が河内から大和を攻めた際には片岡国春が筒井順慶方に就いて戦いましたが、永禄12年（1569年）、片岡春利が当主の頃に片岡城は落城し、松永久秀の手に落ちました。

天正5年（1577年）には、明智光秀ら織田軍により落城し、松永久秀配下の海老名氏が討死しました。

#### 【片岡城跡の施設と現在の姿】

このように、片岡城は片岡国春が築城・居城してから織田信長の軍勢によって落城するまでの間に機能した城郭があり、築造時から松永氏の支配下に置かれる頃までに増築、改変されたと考えられています。

片岡城は葛下川を望む丘陵の先端近くの標高約90mの高所に築かれています。城跡には主郭を中心に大小

◀ 往時の姿が垣間見える片岡城跡



の曲輪や帯曲輪が放射状に取り囲むように配置されており、小規模な施設配置は片岡氏築城の頃と考えられ、主郭より東側の南北方向の空堀や複雑な構造を示す曲輪の辺りは松永氏の時代に築城されたものと思われる。現在、片岡城跡は雑木林と竹林が占める山野と畑地となっており、堀などの施設に伴う地形の痕跡から往時の姿を垣間見ることができま

### ■上牧久渡古墳群（国史跡指定）

#### 【位置と概要】

上牧久渡古墳群は、上牧町大字上牧字久渡に所在する史跡で、平成23年度の宅地開発に伴う発掘調査により、画文帯環状乳神獸鏡や鉄製武器を副葬した墳丘墓（3号墳）が見つかっています。

#### 【特徴】

平成26年度までの確認調査により不整形な前方後円墳（1号墳）、横穴式石室と背面側に大規模な周溝を巡



▶ 国史跡指定の上牧久渡古墳群



らす終末期古墳（2号墳）、木棺を直葬した埋葬施設をもつ後期古墳（4・5号墳）など、古墳出現期（3世紀後半）から飛鳥時代（7世紀中頃）までの7基の古墳が丘陵上に築かれていたことが確認されました。

【上牧町初の国史跡指定】

上牧久渡古墳群では、上牧町を含む葛城北部地域がどのように歴史上の舞台に登場し発展を遂げたかを知るうえで重要な手がかりが多く残されていました。その歴史遺産としての義務付けから平成27年10月7日に上牧町では初めて国史跡に指定されました。

■画文帯環状乳神獸鏡

【銅鏡の発見】

古墳群の最北端に所在する3号墳の埋葬施設から、鍬や槍などの鉄製武器や土器とともに銅鏡が見つかりました。文様や作りは精巧なもので、遠く中国からもたらされたものと考えられます。

【銅鏡と3号墳のもつ意義】

銅鏡が納められた3号墳は、奈良

直径14cmの円形で、中国の神話に基づく神や仙人が浮き彫りされ、48文字が円弧上に配置されている



盆地中西部では最古級の古墳（墳丘墓）です。銅鏡と3号墳は、いずれも古墳出現期の葛城北部の地域特性と奈良盆地の社会構造を知るうえで重要な手がかりとなるものです。

住民が安心して暮らせる町へ

町では平成17年（2005年）の24、955人をピークに出生率の低下や若年層を中心とした転出超過が続いており、人口減少が深刻な問題となっています。そこで、住民が安心して暮らせる町を目指し、次に挙げる取組を進めています。

■町が出会いをサポート

― 出会い・結婚・子育て応援事業 ―  
町の平成24年度の合計特殊出生率は1・09%と、奈良県下で下から2番目という数値となり、さらには未婚率も増加しています。そこで、少子化・未婚化対策として、結婚希望者が結婚できる支援体制を構築するため、平成28年度から出会い・結婚・子育て応援事業の一環であるマリッジサポーターの育成を図っています。同事業では婚活イベントの開催等結



▶町主催の婚活イベント

婚につながる出会いの機会を増やし、時には町に登録しているマリッジサポーターが仲介役となり出会いや結婚の支援を行います。これまで開催した町主催イベントでは毎回多数のカップルが誕生しています。

■子育て世代の希望を実現する官民協働プロジェクト始動

常にニーズに沿ったまちづくりが求められているなかで、子育てママの就業支援事業として町内の大型商業施設内に「ママスクエア上牧店」を昨年12月にオープンしました。同店舗ではママが子どものそばで働ける新しいワーキングスタイルを取り入れるとともに、テレワークを活用するなど、育児の都合に合わせた柔軟な働き方を実現できます。子育て世代の希望を叶えられる町として官民協働で取り組み、「未来の宝である子どもを産み、育てやすいまちづくり」を進めていきます。

■子どもたちが学習習慣を身につける「まきっ子塾」

近年、全国的に、子どもたちの家庭環境や生活習慣の変化、そして貧

◀ ママスクエア上牧店におけるテレワークの推進



困により学力低下などが問題視されています。家庭教育は子どもたちの健やかな育ちの基盤であり、すべての教育の出発点でもあります。

子どもたちが、将来において大きく羽ばたくには、自ら学習に取り組み、さまざまな知識を身につけ、考える力を高め、自分を磨き、自信を持って行動することが大切です。そこで、生活や学習習慣を身につけ、

今後の学力、体力及び規範意識の基礎をなす時期である小学校1年生から3年生の児童を対象に、週1回町内の教職OBや幅広い世代の町民、また町外の大学生を指導員として起用し、家庭学習の支援や家庭の負担軽減を目的に放課後塾「まきっ子塾」

を開催しています。

地域全体で子どもを育てていく気運を醸成することで、子どもたちの郷土への愛着や規範意識を育むとともに、指導員の技術や能力を交流する若者に継承することも期待しています。

### この町に住みたい

本町では平成28年（2016年）に人口の将来展望と今後目指すべき将来の方向を示す「上牧町人口ピシヨ」及び上牧町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定しました。子育て支援や移住転入支援などにより出生率の上昇、人口移動の均衡を図り、平成32年（2020年）の人口を22,500人に維持する将来展望人口としています。そこで、本町においては良好な住環境の整備や高齢者福祉支援、結婚・出産・子育て支援などのさまざまな施策に取り組み長期的な視野で人口ピシヨに示す将来展望人口を実現できるよう、人口減少に歯止めをかけていきます。

けではなく、教育の充実や、子育て世帯や高齢者に対する福祉支援、生きがいや活躍できる場の提供などで、「上牧町に住みたい、住んでいて本当によかった」と思えるようなまちづくりを目指し、そのための施策に積極的に取り組んでいきたいと考えます。

上牧町長 今中 富夫

（平成30年10月29日付第3059号）

▶ 職場のすぐ横にある託児スペース



▶ まきっ子塾



▶ 上牧町の風景





▼みさと天文台上空に広がる天の川



夢と活気のある町に  
ここだけしかない地域の宝を次代に継承する

紀美野町の概要

大阪から車で1時間半ほど、和歌山県北部に位置する紀美野町は平成18年1月1日に旧野上町、旧美里町が合併して誕生した。人口は9,069人(平成30年4月末現在)、総面積は128.34km<sup>2</sup>。うち森林が75%、農地が10%を占めており、丘陵地や段々畑では柿や山椒、みかん等が栽培されている。町には数多くの文化財があり、そのうち桃山時代の建築様式が残る野上八幡宮、県下最古の泉福寺の梵鐘は国の重要文化財に指定されている。

町の中央を流れる清流貴志川は6月にゲンジボタルの乱舞が見られ、夏には川遊びや釣りを楽しめるスポット。町の北部にはパークゴルフやキャンプのできるふれあい公園、満天の星が美

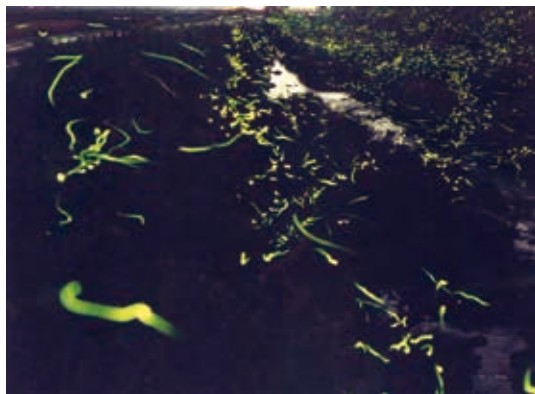
和歌山県  
紀美野町

きみのちょう



しいみさと天文台、南部には秋のスキが美しい生石高原と、豊かな自然が広がっている。

町は、平成28年に観光PR動画「最高の『ない』がここにある」を公開。電車やスーパー、ネイルサロンなど何



▲ホタルの乱舞



もないことを逆手に取り、町の魅力をアピールしている。翌年に第2弾として公開した「訪日外国人観光客〇〇の町」は（公社）日本広報協会主催の平成30年全国広報コンクールで、特選に次ぐ第一席を受賞した。そんな紀美野町の現状や取組を、取材した方々に焦点を当てながら紹介していく。

### 伝統産業を継ぐ

高野山麓の民家の一室。引き戸を開けると目に飛び込んでくるのは、壁一面に所狭しと並ぶ数々の箒たち。〃棕櫚箒製作舎〃と書かれたここは西尾香織氏が手掛ける棕櫚箒の工房だ。部屋の間隙には銅線や木の皮、繊維の束等の材料が揃い、中央に作業スペースが設けられている。

町には棕櫚と呼ばれる、ヤシのような木が随所に生えている。樹皮が腐りにくく丈夫なため、古くから箒や縄など日用品の材料に使われてきた木だ。町の周辺は、昭和まで棕櫚皮と棕櫚製品の全国一の産地として知られていたが、需要の減少や上質な棕櫚の消失等により、現在は中国から輸入している。棕櫚箒職人の西尾氏は元々広島県出身で、旅行で和歌山県を訪れた際に風土に魅せられ、その後同県に移住したという。この道を選んだきっかけは、「郷土資料で見た棕櫚箒が忘れられなかった。別の仕事を持っていたため、

しばらく迷っていたが、当時師匠は高齢で後継者が一人もおらず、誰かが継がなければこの技術が失われてしまうという危機感、そして何より棕櫚箒の奥深さと魅力に惹かれて始めた」と語る。今では県内で西尾氏を含めて3名ほどが伝統的な棕櫚箒を作っている。

〃一生に3本あれば足りる〃といわれるほど丈夫で長持ちする棕櫚箒は和歌山県の伝統工芸品でありながら、町の小・中学生にもあまり知られていないという。「箒のことを知って欲しいし、使って欲しい。子ども達が歴史を学べる場所を作りたい」伝統産業の継承にかける思いには強く、「柄の部分には県内日高町の黒竹を使用しているため、昔のように原材料すべてを県内産で揃えて作れたら」と語る。

棕櫚箒職人は、一般的には10年修行してようやく一人前になるといわれる



▲棕櫚箒製作舎には大小さまざまな箒が並ぶ

### 棕櫚の木



が、修行をすれば誰でも一人前になれるとは限らず、なれたとしても収入は安定しないという。「後継者がいないければこの産業はどうなるか分らない。住んでいる地区も高齢化が進んでおり、今後10年でこの地域がどうなっていくのだろうかと考えることもある。それでも、自分が生きている間はこの箒作りを頑張りたい」と想いを語る。

### 星ふる里

美しい星空が見られることから「星ふる里」といわれる紀美野町。中でもみさと天文台は全国有数の天体観測所で、季節にあわせてイベントを開催したり、開館20周年を迎えた2015年には2組が結婚式を挙げたりと、さまざまな仕掛けにより近年では広域メディアで取り上げられることも多い。月明かりのないよく晴れた夜空では肉眼でも天の川を楽しめるとあって、夜の観望会では駐車場が足りなくなることも珍しくないほどの人気スポットに

なっている。

内部には県内最大の口径10.5cmを誇る大型望遠鏡があり、観望会では実際に覗いて天体を観察できる。台長の山内氏によると、さらに大きい口径の望遠鏡を持つ天文台は全国にあるが、この大型望遠鏡に収まる直径1m超の大型鏡は「現代の名工」に認定され、鏡面精度日本で知られる研磨職人、苗村敬夫氏が手掛けた貴重な逸品で、さらに大きいものは四国に一つあるのみ。苗村氏は高齢で現役を退いており、後継者がいないことから、今後この大型鏡は文化財的な側面を持つものになっていくという。

天文台では、「みさと天文台友の会」スタッフや町内のカフェ等の協力のもと、観望会の実施やイベント運営、情報発信等を行っている。常勤スタッフの増員による運営体制強化のほか、県外からの教育旅行生の受入れなど、さらなる観光客増加に向けて動き出している。

### まちづくりを支える移住者

週末になると多くの人で賑わう場所がある。老朽化のため取り壊し寸前だった築90年の米蔵を、町内で農業を営む紀州マルイチ農園の北裕子氏が改修し、リノベーションをしたというカフェ「くらとくり」だ。外壁には農協のマークが残り、白壁の店内は米蔵の



面影や木のテーブルが温かみのある空間を作っている。

くらくくりでは3店舗が週末のみ営業している。その一つ、カフェ「Fontanal」オーナーの本田裕美氏は、紀美野町にUターンしてカフェをオープンした。「改装した納屋にキッチンをつけて好きなことを始めたら、色々な方が「私もやりたい」と手を挙げてくれた。紀美野町へ来るまではお隣さんが何をしているかを気にすることはなかったが、ここへ来て横のつながりができ、みんなで力を合わせてやっていこうという考え方になった」と話す。周りに同世代が多く、一緒にイベントを開催することもあったという。「いいタイミングで町に帰ってこられた。今は地区の中で色々とやっているが、他の地区や地域とつながればもっと大きいイベントができるはず」と語る。



▲くらくくり外観



▲きみの定住を支援する会

町への移住者は現在70世帯。NPO法人「きみの定住を支援する会」が相談窓口として移住希望者をサポートしており、町と地域が協働で移住・定住の推進に力を入れている。寺本町長によると、「移住希望者は増えているが、町の習慣やどんな生活をするのかといったことをきちんと理解したうえで来て欲しいとの思いから、受入れには時間をかけている」とのこと。これまでに移住後に町から離れた世帯は数組にとどまっており、町をあげての支援体制や、「紀美野町においてよ」と受入れに積極的な住民の存在が定住率の高さに表れているのだろう。

町は地域おこし協力隊の受入れにも

積極的である。平成22年度から採用を開始し、現在は5名が活動している。その一人、水島千絵氏は現在2期目で、小川地区の地域団体「小川の郷づくり会」とともに直売所と古民家の運営、地区報の編集等を行う。紀美野町は米や野菜、果物など何でも栽培できる土壌があり、住民も穏やかで気さくな人が多いという。町の課題については、「空き家が多いが、町内に不動産業者がないため個人間での契約が必要だったり、仏壇があるため改修ができなかったりと壁もある。ただ、町外に通勤できるアクセスの良さがあるため、もっとスムーズに家を借りることができれば、特にファミリー層にとって住みやすい地域ではないか」と話す。



▲小川地区にある小川の郷直売所

地域の和、人とのつながり

△手作りの安心・安全な味を伝承▽

町の高齢者比率は44・2%（平成27年国勢調査）で、県平均の30・9%を大きく上回る。数字で見ると高齢化の先進地とも言えるが、朝早くから農作業をするおじいちゃんや、山道で颯爽とバイクを走らせるおばあちゃんなど、元気な高齢者が多いのが現状だ。

中でも一段と元気なのは、平均年齢71歳の生石加工グループである。同グループは、地元産の農産物を原料としたおいしいもん作りに励んでいる。大福、金山寺味噌、山椒みりん漬け、ブルーベリージャムなどすべて手作りで、果物の栽培もしているという。「柚



▲「田舎カフェ」に参加する生石加工グループ



▲サロン楽笑の活動風景

子は手で搾ったものをボン酢に、余った部分は皮だけ細かく刻んで、砂糖や味噌を加えて柚子みそにしている。状態のいい皮はマーメイドに使用している」と、一つ一つにこだわりや工夫が詰まっている。町でイベントがあれば出店したり、菓子やこんにやく作りなどの「ほんまもん体験」の受け入れをしたりと、日々精力的に活動している。

▲生涯元気でいられる地域に〜

「この歳まで生きるとも運やな」そんな笑い声が響くのは、長谷地区の集会所「サロン楽笑」の活動風景だ。町では現在46箇所の地域サロンが活動している。地域サロンとは住民が気軽に集まって交流する場で、健康に関

する講座や健康チェック、料理や手芸等地区ごとに自由にメニューを決めて活動している。多くのサロンでは椅子に腰を掛け、おもりを使って体を動かす「いきいき百歳体操」が取り入れられている。高知県高知市が介護予防事業として開発した体操で、町内でも広まっている。今年3月には紀美野町と隣の有田川町がこの体操と、意見交換等を行う交流会が開催され、参加したという住民からは「他の地域の活動を知ったり、話を聞いたりして励みになった」との声が聞かれた。

サロンコーディネーターによると、高齢化や人口減少により町内の地域サロン参加者や活動は減少傾向にあるという。活動のメニュー作りも難しく、ボランティアで引き受けてくれる講師探しにも苦労しているとのこと。それでも、「回覧板等を利用して自主的な運営・参加をもらえるよう、工夫をしている。決まったメニューをするのも良いが、集まって話をするだけでも介護予防になる。集会場に来ることがまず大事」と地域サロンの必要性を訴える。

誰かと関わりを持つことで元気になったり、何かあったときに助け合ったり、高齢化の進む地域では、人とのつながりが大きな役割を果たす。今後はいかに活動を継続していくかが課題である。

次代に続くまちづくり

人口減少や高齢化、鳥獣被害、所有者不明土地や空き家の増加等、町の課題は他の自治体と同じくさまざまである。一方、地域サロン事業の実施、農産物や加工品等の生産・販売等、高齢者を中心とした活動や、Uイーターンによる飲食店の運営、産業の活性化等、住民が進んでまちづくりに関わっている。「観光客を呼び込みたい」「ゲストハウスを開業したい」「産業を続けていきたい」「100歳まで生きたい」それぞれの夢や想いが人とのつながりを生み、町全体に活気をもたらしている。「人が少ない分みんなが顔見知りで、どこでも安全。家の近くの畑も子ども遊び場になる。泣き声を気にせず過ごせるし、声を掛けてくれるおばあ



▲秋のススキが有名な生石高原



▲山間から望む町並み

ちゃん達が多く、本当の孫のようにみんなに可愛がってもらっている「そう話すのは子育て中のお母さん。おばあちゃんは、「何もないけど、空気が美味しいし、山も川もある。夜にはきれいな星も見られる。みかんに柿に、美味しい食べものはたくさんあるよ」と笑顔を見せる。若者は少なく都会的なものはないが、美しい自然があり、町を支える人々がいる。小さな町だからこそ一人ひとりの役割があり、誰もがまちづくりの主役なのである。

ここにしかない豊かな資源（地域の「宝」）を守り、発展させていくために、紀美野町はこれからも住民や地域と協働し、次代へと続くまちづくりを進めていく。

全国町村会広報部  
(平成30年7月30日付第3004号)



▼玖珠町のシンボル伐株山



# 自然を愛し子どもとともに夢を育み 誇りを持てる心のふるさと 玖珠

## 玖珠町の概要

玖珠町は大分県の西部に位置し、田園風景がひろがる自然が豊かな地域です。九州最大の一級河川である筑後川の上流部に位置し、町の面積は286・60km<sup>2</sup>と大分県全体の4・5%を占めています。人口は15、823人（平成27年国勢調査）と5年前の調査と比べて人口減少が続くなど、少子高齢化が進行しています。町のシンボルは伐株山<sup>きりかぶさん</sup>。名前のとおり山全体が切り株の形をしている伐株山には「昔々、大きな楠の木があり、大男が切り倒した後の切り株が伐株山である。」との言い伝えがあります。

## 大分県 玖珠町

くすまち



また、村上水軍の一族である来島氏（後に久留島家）が治めた森藩のまちなみが現在も残っています。

町内には恵まれた自然を活かしたさまざまな観光スポットがあります。平成29年4月には中津市と玖珠町にまたがる広大な景勝地・耶馬溪の歴史や文化を語るストーリーとして「やばけい遊覧く大地に描かれた山水絵巻の道をゆくく」が日本遺産に認定されました。その他にも中世から近世初頭の城郭である史跡「角牟礼城跡」・森藩久留島氏の庭園であった名勝「旧久留島氏庭園」、テンプル状の台地（メサ）で形成された「万年山」や「大岩扇山」。「立羽田の景」や「麗谷の景」といった奇岩秀峰や溪流などの景観を持つ国指定文化財名勝「耶

馬溪」、登録有形文化財に指定されている旧豊後森機関庫と転車台の残る豊後森機関庫公園、自然の中でゆったりとした時間を過ごすことができる三日月の滝公園、日本名水100選に選ばれた下園妙見様湧水など絶景箇所が町内随所にあります。

### 童話の里のまちづくり

玖珠町では「日本のアンデルセン」と呼ばれ、明治、大正、昭和の3代にわたって子どもたちに語り聞かせをした教育者である久留島武彦の功



▲童話碑

績を称え、戦後間もない昭和25年に童話碑が建てられました。これをきつ



▶ジャンボこいのぼり

かけに毎年5月5日のこどもの日には日本童話祭が開催されます。この祭りは子どもたちの成長を健やかに育み、世代をこえて楽しむ祭りとして今年で69回を数えました。仮装パレード、演劇、玖珠川での魚のつかみ取り、迫力のある全長60mのシャ

ンボこいのぼりのくぐり抜けや大空を泳ぐ55mのこいのぼりは、多くの歓声に包まれ、子どもから大人まで大いに楽しんでいただける祭りとなっています。

このほか、12月には子どもたちに夢と楽しみを与える「空からサンタがやってきたフェスティバル」を開催しています。地元のパラグライダー愛好家の方たちがサンタクローズに扮して空から舞い降り、着地地点で待つ子どもたちにプレゼントを手渡しすると、広場は多くの歓声に包まれます。

### 農業と教育、福祉のまちづくり

玖珠町では平成27年に「玖珠町まち・ひと・しごと創生戦略」を作成し、「楽しく学び個性と感性を育むまちづくり」「教育・文化の向上」、「活力あふれる活気あるまちづくり」(産業の振興)、「健やかで健康に暮らせるまちづくり」(保健・福祉の向上)、「玖珠町の特性を活かしたまちづくり」の4つを掲げ、地方創生の取組を行っています。

「楽しく学び個性と感性を育むまちづくり」では、町内で唯一の高校である県立玖珠美山高校の魅力の創出



▲玖珠志学塾

と学力向上を図るため、行政、学校と民間企業が連携し「玖珠志学塾」を創設しました。「玖珠志学塾」は県立玖珠美山高校の生徒であれば、無



▲自習ブースでは集中して学習できる



## 森地区街なみ環境整備事業・ 玖珠町ランドデザイン事業

地域が主体となり地域活性化に取り組むため、2つの事業を実施しました。

地域住民が主体となってまちづくりに取り組み「地域の活性化につながるためにはどのようにしたらよいのか」をテーマに話し合いを重ねた結果、玖珠町に残っている伝統的な建物や施設を活用し、人を地域に呼び込むことを目的として取り組んだのが「森地区街なみ環境整備事業」です。

「健康やかで健康に暮らせるまちづくり」では、中学生までの医療費を全額公費負担し、子育て世帯の負担軽減に取り組んでいます。また、JR久大線の豊後森駅に隣接する豊後森機関庫公園の隣地に、障がいのある方の就労支援施設「玖珠・森のクレヨン／森の米蔵」が、本年6月に開設しました。ここでは、食事やパンやケーキ等を提供するカフェレストランや多目的交流施設がありますので、ぜひ一度お越しいただければと思います。

玖珠町の中心地から2kmほど北にある、旧森藩の城下町は現在も昔のたたずまいを数多く残しており、風情のある建物が建ち並んでいます。中でも古民家を改修した「カネジユウ館」は、観光情報発信拠点としての役割を果たしています。ここでは、ゆったりと落ち着く店内と玖珠町の食材を使ったランチが大変好評を得ています。

「栖鳳楼」や1601年に初代藩主久留島康親が郷里伊予国の大山祇神社から御祭神を勧請したと言われる末廣神社があります。八代藩主が再興した神社の本殿は「鞘堂」という覆屋の中にあり、樺で細部まで丁寧に造られています。庭園の隣には、昨年4月に開館した久留島武彦記念館があり、久留島武彦の功績が学べる施設になっています。城下町と旧久留島氏庭園周辺を結びつけることで、歴史や文化を感じ、美しい景観を多くの方に見ても



カネジユウ館



機関庫跡とSL29612

らうことで、観光客を呼び込んでいきます。次に、玖珠町の中心地にあるもう一つの観光資源、「旧豊後森機関庫」を活用し、地域の活性化を目指した「玖珠町ランドデザイン事業」は、当時、久大線の要であった旧豊後森機関庫と、周辺商店街で当時の雰囲気を出し、観光客を呼び込むとするものです。

この旧豊後森機関庫を中心として、周辺の商店街と一体となった取組により人の流れをつくり、地域の活性化を目指すものです。この取組をより効果的に発展させるため、JR九

州の観光列車を手掛けた工業デザイナーの水戸岡鋭治氏から、景観デザインや町の活性化についての助言をいただきながら、地域で事業展開をしています。

また、平成27年度に福岡県志免町から蒸気機関車SL29612を譲り受け、現在、その重厚な雄姿を機関庫公園でみることが出来ます。志免町とはSLの譲渡を契機とした交流が現在まで続いています。

その他、機関庫公園内には、豊後森機関庫の歴史を学べるミュージアムやミニトレインの運行など、休日は大変なにぎわいの場となっています。

これら2つの地域資源を活用し、



▲展望休憩舎-KIRIKABU HOUSE-

玖珠町を訪れた方に長く滞在していただくために、玖珠町のシンボルである伐株山の山頂には町を一望できる「展望休憩舎-KIRIKABU HOUSE」を設置しています。天気の良い休日にはフードトラックによる軽食の販売を行っています。また、山頂には子ども遊び場として通称「ハイジのブランコ」があります。山頂から見る景色は解放感に溢れるほどの景色ですので、ぜひ立ち寄って、のどかな風景を展望していただければと思います。

### 大麦による産官学が連携した新たな取組

玖珠町の特産品として玖珠米、豊後玖珠牛や椎茸、ピーマン、トマト等がありますが、さらに地域を元気にする特産品をつくらうと、近年、美容や健康に良いとされている大麦に着目しました。大分大学や別府大学等と民間企業、地元の農業法人と行政が一体となり、玖珠町で大麦を生産から普及、加工、販売に繋げ、地域経済の好循環をつくるプロジェクトを達成するため、平成29年4月に産官学の関係機関からなる玖珠町大麦プロジェクト研究会を立ち上げました。

### 大麦を使った商品を開発



この研究会では「大麦といえば玖珠町」といわれるような産地をめざしさまざまな取組を行っています。

昨年8月には大麦シンポジウムも開催し、全国から大麦研究に携わっている先生方を招き、大麦の効用から今後の展望まで講演していただきました。また、9月からは町内外で大麦の料理教室を行っています。大麦を身近な食材として普及啓発をすることで、大麦の魅力や調理の手軽さを多くの方に知ってもらうこと。そして何より、町の新たなブランドとして農家の方が大麦栽培に魅力を持ってもらえることが重要だと思っています。玖珠町の大麦はすべて町内産で安心・安全の食材です。ぜひ一度手に取ってお買い上げただけ

ばと思います。

### 今後のまちづくりについて

玖珠町においても全国の多くの自治体同様「人口減少による過疎化、高齢化」が大きな課題となっています。人口減少時代に入った現在、U・I・Jターンを推進するための町の魅力づくりや安定した生活が確保できる働く場の確保、地域活力の維持増進等、行政の果たす役割は益々大きくなっています。

そのような中、念願の玖珠工業団地に企業進出が決定したことで、安定した雇用の確保が期待されます。今後は、地域おこし協力隊の受入れ、空き家バンクの登録等をさらに推進し、加えて本年度創設を計画している(仮称)地域マネージャー制度により、地区コミュニティ運営協議会と連携を図りながら、「地域課題の解決」や「地域資源を活用した地域産品の開発」などに取り組み、活力あふれる地域づくりを進めていきます。

玖珠町長 宿利 政和  
(平成30年10月1日付第3055号)